

Title	質疑應答
Author(s)	
Citation	地球 (1924), 2(2): 382-385
Issue Date	1924-08-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/182720
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

族の各章とし、各地の氣候、風土、産物、年中行事等より衣食住其他の風俗習慣の細節に及んでゐる其の資料は各正史の地理志、風俗志、歷代の文學、各府志、縣志、等の文獻から取り相當に根據のあるもの、みで編者の獨斷を交てゐない從來支那の風俗習慣を取扱つたものは外國人側には相當出てゐるが中國人自身の見たものは餘り多くない本書は支那の風俗を詳細に知るに適當するのみならず、又此の國の地方誌研究の資としても推奨するに足る。(田中)

○地理教材研究第四輯

(大正十三年四月五日發行東京京橋區南傳馬町二、目黒書店)

(定價一圓二十錢)

地理教科研究第一輯の世に出たのは大正十一年の四月であつたが、主幹西田典四郎君の努力によつて立派に成人した、今度の輯には天津市と膳所町、秩父地方の地形、愛知縣の耕土工業北海道の農業、漆器の研究、紀伊半島の東岸と南岸、名古屋といった風の地方の地理的考案が二十七項目に互つて詳細に論じられてゐる、が中には名所案内的の記事例へば、淡路島、伊豆半島の温泉といった風の單に報告にすぎないものもあるが、多くは眞摯なる研究努力の跡の見えるのは頼母しい、發起人として名を列してゐる我地理學の大家の技書の少いことを遺憾に思ふは是我輩一人のみならんやである。(藤田)

新著題目 (1)

支那

陝西の黄土と岩窟住居 (M. L. Fuller and F. G. Clapp; Loess and rock dwellings of Shensi, China.) *Geogr. Rev.* Apr. 1924, 715—726.

蒙古に於ける第三回亞細亞探檢の測圖 (F. K. Morris; Notes on the mapping program of the third Asiatic Expedition in Mongolia.) *ib.* 287—292.

1921年 (Ch. Bell: A year in Lhasa). *Geogr. Journ.* LXIII, 1924, 89—105.

西部雲南峰崖の衝上 (R. W. Gannett: Overthrusts of the Honey Cliffs in Western Yunnan, China.) *Pan-American Geologist*, XL1, 1924, 99—102.

北支那の白堊紀層 (G. B. Parbour: Cretaceous Beds in North China) *nature*, CXI, 1, 1924, 194—195.

質疑應答

文檢地理科試驗問題解説、紙數の都合により後半は次號に掲載す。

問 琉球列島の自然地理

答 地理學上では薩南及琉球の諸島を一括して琉球列島と呼ぶ地體構造上からは琉球海又は琉球弧島と名づける。之を大別すると薩南諸島、川邊七島、大鵬諸島、沖繩諸島、及び先島諸島の五部に分けることが出来る。この列島は東海の実線に成すが海

深から云ふと北西側即ち内側の深さ二千米の海溝と南東側即ち外側の深さ七千米に達する海溝との間に屈起して居る。各島は土地狭小ではあるが山岳には比較的に高いものがあつて、薩南諸島の屋久島には千八百八十五米の九重嶽が崛起して居り、奄美大島の湯灣岳(七〇一米)、沖縄島の西銘岳、石垣島の於茂登岳等は皆五百米以上の海拔を有する。本列島は地質構造上三縦列を成す。外列は種子島、喜界島、沖縄の南部、宮古島に互つて低平な地勢を呈し第三紀層及び第四紀層より成る。中列をなすものは屋久島より大島、徳ノ島、沖縄島を経て石垣島に互るもので古期の岩層より成る。内列を成すものは硫黄島、口之永良部、中ノ島、諏訪ノ瀬島、横富島、粟國島等であつて、何れも險峻な火山島に屬し西は尖閣群島に接する。この火山列は霧島火山脈に屬するもので北端は九州に入つて霧島の鍋狀陥没地に終つて居る。

氣候は中和で年平均温度は華氏七十度で、八月最も暑く(平均温度八十度)二月最も寒い(平均温度五十度)。雨量は多く殊に大島は日本中最多の降水量がある處である。

問 シヤム國の人文地理を述べよ。

答 普通の教科書に見える如く、印度支那半島に於ける唯一の獨立專制王國にして住民は印度支那族なる暹羅人なり、宗教は佛教を奉ず、移住支那人頗る多く、農商に勵む、メナム河下流の平野には米を産し、北部山地のシエンマイ地方はチークの産多し、國內象、水牛の飼育盛にして象牙牛皮を出す、首府弊谷はメナム河の河口に近くバクナムを外港として米チーク等を輸

出し、日本との交通は山田長政の事跡に明かなる如く徳川初期に頗る親密にして、近來通商條約を結び日本國民に信頼せんとする傾向あることも注意に値す。さうなので、要點は殆ど盡くされてゐる、これを細説するには本欄紙数の許しかれる點である、讀者の中に擬答を書けし注文があるが、一々其の希望をいれたい、もし暹羅の人文を悉しく知らんと欲せば左記を參考せられたい。

Campbell: Siam in the XXth Century London, 1904.

問 太平洋の主要なる海流につきて述べよ。

答 本問に對してこの際各學校に備へつくべき海流圖のあることを報告す。それは帝國海軍省水路部から敷葉の海流圖が發賣されてゐることで、大正六、七年間に刊行され、海圖と共に賣出されてゐる、これには左の如く記してある。

太平洋に於ける海流を支配する第一の原動力は北東及南東の兩恒風なるが故に直接此等恒風に因り勵發さるゝ南北兩赤道海流は太平洋に於ける海流の概況を知らんとする人には最も多く注目し値するものあり、北海道海流はサンルカ岬南方より菲律賓諸島に至る海面に亘り、延部約七五〇〇哩、其流向概々西にして北太平洋西部マシヤル島、カロリン島附近に到り、一部は左に轉向して逆赤道海流に流入し他は漸次北西に轉向し呂宋東方、於て概ね北方に向ひ臺灣の南端附近に至り日本海になる、黒潮と稱するものは是也、日本海流は是より臺灣東岸に沿ひ北上し南西諸島の西側及び其の北部島嶼間を過ぎ大隅海峡を経て漸次九州四國及び本洲の太平洋側に接し北東方に進み本州南

東端より陸岸を離れ漸く偏西卓越風の區域内に入る、(注意、この文にある通り黒潮は琉球灣の内側を通る事を、圖上にて忘れてはいけません)本州南東端を去れる此の日本海流は是より更に偏西卓越風に勵發せられ所謂西風海流となり、直路北米大陸に向ひ其陸岸に衝突し一部は北方に轉向するも、其大部分は南方に轉向して再び北赤道海流に歸投して以て北太平洋に於ける一大環流を完成す、南赤道海流は同様に南太平洋に於て一大環流をつくる、逆赤道海流は前掲南北兩赤道海流の間に介在する逆流にして西往ヌ〇度附近に至り南北赤道海流に復歸す、北太平洋環流の外縁は其境界概して現著なれども、其内側は内部に近づくに従ひ漸次流勢を減殺し其境界不明なり、日本海流は多くの支流あり、臺灣海峡海流、對島海流支那東海黃海支流、津輕海峡海流、宗谷海峡海流、及小笠原逆流等これと親潮即白令より南下する寒流は其西側は千島列島及北州東岸に沿ひ東側はアルユーシアン島附近より北州東方の遙か沖合に及ぶ。

ざつとこゝにいふ風で普通の教科書よりも確實に記されてゐる圖の材料は帝國艦船の報告を基礎としたものであるのは云ふ迄もない、かう正しい觀念を得んとする人にはこの水路部の海流圖を見るべく推奨する、但し答案の地圖は小川、山崎兩先生の教科書にある海流圖の程度で結構である、水路部の眞似をせないでもよろしからん。

問 地形の若返りとは何ぞや實例を挙げ説明せよ。

答 辻村太郎著地形學第二十七頁に曰く「生物の生涯と同じく地理的輪廻が無事に其の終結まで進むことは寧ろ稀である。生

物が天壽を全ふすることの困難であると同様に、地形も亦必ず準平原まで老いて行くことは保證されない。但し生物の場合には死滅に相當するものは輪廻の中絶或は頓挫である。嚴密に云へば陸地面が海水下に没することこそ其の滅亡であるが、中絶は多く地盤の隆起(或は海面の下降に伴ふ侵蝕力の増大によつて來たされる。故に屢々返り Rejuvenation, Yehingung の語を以て此變化を云ひ現はすことがある。或る時期まで進んだ地形が若き時期の特徴を帯び其所を出發點として再び輪廻を續けて行く」この説明で十分であるが其要點は陸地は外的重力のために侵蝕をうけて遂に準平原になるが、其の準平原が再び隆起して新たに侵蝕をうけて壯年期の地貌を呈するのを若返り云ふのである、例令ば丹波高原の東部のこさきがそれであつて、この山塊は山城の北部から若狭の間に廣がり平均六百米内外の高度ある一大高臺であつたが、その高臺であつた證據は地形圖の標高を見て明に知られる、しかし現在の實際は山又山で深い豁谷がこの間を横きつて壯年期の地貌を呈してゐる。こゝにいふ風な地形を若返りといふのである、其他の實例は、同書について見らるべし。

問 ロシヤ國の聯邦組織を説明せよ。

答 一九一七年ボルシエビキの政變起りて勞農政府建設後二〇年末迄内亂外戦相つぎしも、其間に勞農政府は漸次其地歩を占め反過激運動に對して赫々たる戰勝を収め一九二一年始めて平和の時期に入れり、茲に於て勞農政府は其主義として各民族の自決を認めて、自治權を附與し、勞農露西強聯邦の一部として

自治的共和國を形成する事計す方針を建てたり、従つて現在の勞農露西亞には、自治的共和國若くは自治的コンムーンの名稱を冠する大小の自治國が二十許り出來て其等の自治共和國が相合して勞農露西亞聯邦共和國を形成するの狀にあり、今左に之を列舉すれば、一、ウクライナ勞農共和國、二、獨逸人勞働者コンムーン(小自治國)、ウオルガ河畔に在り、三、バシキル共和國ウフアール縣に在り、四、韃靼人共和國カサン縣に在り、五、チュワシ人共和國、六、ビバ勞農共和國、七、アゼルバイジャン勞農共和國、八、アルメニア勞農共和國、九白露勞農共和國一〇、カレリーヤ共產自治國、ペトログラードの北に在り、一一、ダケスタン共和國高加索に在り、一二、カルムノーク共產自治國アストラハン縣下に在り、一三、チエレシス共產自治國等の小自治國ありて、其中心はモスコウを首府とせる大露西亞勞農共和國で、これに白露とウクライナ即小露西亞の共和を合せて殆んどその歐洲露國の大部分を占有することになるなり而してこの歐洲露國の版圖の中に大小合して二十三の自治共和國成立する狀にして其結果行政區劃に變動を生じ縣郡の廢合あり、最近勞農政府より全露地圖を發行せり(ショカラフイカルレビユウ四月號を見よ)蓋しこれらの各聯邦はすべて一九二〇年より二一年の間にレーニン政府の赤化政策に併合されしものにて、もさ革命に際し反過激派となり各獨立を宣言したるものあれども、今日はずべて勞農政府に征服されたる也、従つて名は自治と雖も實はモスコウにある最高の中央執行委員會の專制に服従してゐるものとす。

質疑應答

問 季節風帶地方に於ける産業の特色につきて説明せよ。

答 これに類似の問題が一昨年も出ました、東南亞細亞の季節風帶地方は球上尤も人口稠密の地であるが其原因は季節風の齎らす夏期の多雨のために生ずる米作の結果である、この地方産業の特色は水田の耕作で、米を第一とする外、多雨高温を愛する植物に茶と桑がある従つて製茶は世界的の本場で印度支那日本があり養蠶も亦世界蠶糸の九割を産し日本支那の主要産出地がある、答案をかく人はこれらの産業について、特色とするところを詳細に説明するがよい、日本の統計年鑑を見るに特に米や茶や養蠶は、之を我國と比較して記してあるから參考によろしい、それから時々官報などで米作の報告が出ます、注意して平素から「ノート」を作つて置かれない、こういう問題が外國の書籍でみた丈けでは適切な現状をのべる事ができせん。

問 日本にて最も好き地質圖には如何なるものがありますか。

(兵庫縣地理同好生)

答 農商務省地質調査所出版に係る日本全體に互々ものでは

百萬分一及び二百萬分一、日本帝國地質圖

二十萬分の一地質圖中代表的のものには、

生野圖幅、高知圖幅、木曾圖幅等があり、

七萬五千分の一地質圖では、

山口圖幅、

一萬分一等の精査地質圖では、

大日本帝國油田第一區越後東山地圖、常磐炭田第一區(湯本四近)地質圖、等で何れも震災後再版中なり。